

我が人生に悔いなし

交通安全を見守る
『ソニー坊や』の誕生



統合医療センター 予防医
クリニックぎのわん 院長

天願勇

「緑深き樹々 大調和煌く 生を見つつ 死を見つつ 天地一切の人・物に感謝す 我が人生に悔いなし ありがとうございました」。Tさんが他界する直前に詠んだ詩である。病室にはシルクロード絵図之路(喜多郎作)の曲が流れていた。

大正8年、沖縄生まれのTさんは東京の目黒高等無線学校技術科を卒業。21歳の時、福岡24連隊に入隊。昭和17年、ビルマ上陸作戦に参戦、25歳で陸軍軍曹に昇進した。電気関係の知識があり英語も話せたのでトン拍子で出世した。ビルマの激

戦で九死に一生を得て生き残り、敗戦後は米軍占領下の沖縄に戻り米国軍政府に勤務。4年後に会社を設立して通信機器を修理・製作し有線放送も始めた。米軍と交渉し払い下げ物資を使って学校や放送局のラジオを作った。その頃からソニー創業者の井深大・盛田昭夫両氏との親交があり、沖縄総代理店『電波堂』を開店した。昭和47年に沖縄が日本復帰した後、隣に新たにビルを建て、旧館には、ギャラリー&ホール『スペースアート』を開き『街角に音楽を溢れさせよう!』を合言葉に音楽発表の場を設けた。

日本ボイスカウト沖縄県連盟コミッショナーとして沖縄の青少年育成に力を注いでいたTさんの体に異変が起きたのは昭和60年のことだった。専門医に肺がんⅢ期、頸部リンパ節転移があり手術適応なしと診断・告知され放射線・化学療法を受けた。相談に見えたTさんに「がんの告知を受けた時の感想はいかがでしたか?」と尋ねると、「恐れはないが面白くない……。戦うしかない」と答えた。病室にはいつも音楽(心の美術館・ワインダム・ヒル)が流れている。1年経つて、首のリンパ節敗戦後、廃墟と化した沖縄で情報通信事業を開拓して生き抜いたTさんは、本望を遂げ「我が人生に悔いなし」と言い残して逝った。他界し数日後、Tさんは自筆で書いた手紙を差出し「ありがとうございました」と言った。それが冒頭の詩である。1週間後、意識が朦朧とした耳元で「おとうさん迎えに来ているの?」と妻が尋ねると、首を横に振り、浅か

つた呼吸が深くなり……、止まつた。享年70歳、自らの死を覚悟した見事な最期だった。

パイオニア精神の証

Tさんから学んだのは、最期の時を過ごす場と癒しの音楽の相乗効果である。Tさんは「薄明の中、地平線の彼方からラクダに乗った一群が静かに歩んで行く……、そのような情景を彷彿とさせる音楽」(喜多郎のシルクロード)を聴きながら迫りくる病魔と闘っていた。音楽には病気の人やあの世に旅立つ人の心の痛みや緊張感を和らげる効果もあるに違いない。

戦後70年経つた今、地上戦のあつた沖縄を含む日本国民は戦争を知らない世代が大多数を占めている。戦後は天皇制国家と家族制度のタテ割りの秩序が崩れ去り、平和憲法のもとで、国民が国家の主権者となるといふこれまでの価値観が逆転して平等なヨコ型社会へと転換した。軍国主義教育を受け、アジア各地で通信部隊の尖兵として転戦したTさんの青春は戦争で明け暮れた。

敗戦後、廃墟と化した沖縄で情報通信事業を開拓して生き抜いたTさんは、本望を遂げ「我が人生に悔いなし」と言い残して逝った。他界して20年経つたTさんの『パイオニア精神の証』は今でも県内に残っている。2mほどあるコンクリート製の人形『ソニー坊や』だ。沖縄本島各地の学校の近くや交差点に建てられている。交通戦が始まる以前から

交通安全を見守る『ソニー坊や』は、誕生していたのである。なんという『先見の明』だろうか。「ソニー坊やを探そう&語ろう会』が去年開催され、「ソニー坊やと仲間たち」という

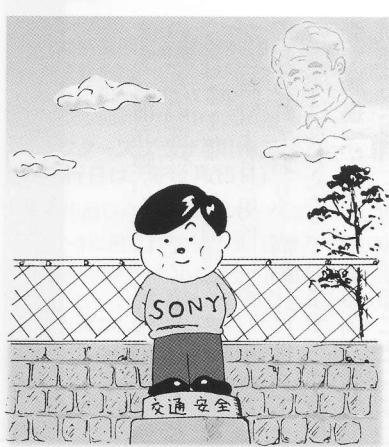


イラスト:さとうしげじ
『Tさんの生きた証の真意』は未だ謎に包まれている。